

2022年5月15日 礼拝説教要旨

詩編講解説教109「呪いから祝福へ」

詩編109：21～31、Iペトロ3：8～9

詩編第109編は詩編の中でももっとも激しい内容を持っています。前半の6節から20節までが呪いの言葉であり、新共同訳聖書では特に8節以下は段落を下げています。この部分はいわゆる呪いの儀式において用いられた言葉であると考えられ、この部分を他と区別しています。敵対する相手が用いた呪詛を詩人がここに引用しているという解釈があります。呪いの言葉だけに、これを詩人の言葉として捉えることに抵抗があるのでしょうか。このような呪いの言葉をなるべく詩人から遠ざけようとする意図が伺えます。

やはりこの詩編はかなり危険が伴うもので、実際にこれが呪いとして使われておりました。カルヴァンは詩編注解の中でこう述べています。「誰かが、その破滅を願い求めて止まないような宿敵を持つとき、来る日も来る日もこの詩編を唱えさせるといのが慣わしになっている」と。また18世紀のある記録では、誰かを呪うためにこの詩編を1年と9日の間、朝から晩まで唱える。だがこの呪いを一日でも止めるなら、呪いは敵にではなく本人に振りかかると。すでに魔術的なものに変質しています。これは本来の詩編の意味からも大きく逸脱しています。なぜこのような危険な呪いの言葉を詩編は含むのでしょうか。

この詩編の表題には「ダビデの詩」とあります。ダビデの立場に立ってこの詩編を考えてみるとどうでしょう。ダビデはサウルの妬みを買ひ、一方的に敵意を持たれ、本当に理不尽としか言いようがない攻撃を受けておりました。そのダビデの心境は冒頭の部分によく表れております。「憎しみの言葉はわたしを取り囲み、理由もなく戦いを挑んで来ます。愛しても敵意を返し、わたしが祈りをささげても、その善意に対して悪意を返します。愛しても、憎みます」(3～5節) 善意に対して悪意を返される。そういう一方的な仕打ちを受けたならば、皆さんはどういう心理状態になるのでしょうか。

ここを読みながら、一つには今起こっている戦争のことを思いました。ウクライナの人々からすればロシアから一方的な軍事侵攻を受けています。何故にあのような悲劇を経験しなければならないのでしょうか。大切な家族を奪われ、国を奪われ、生きる尊厳が踏みにじられていく。誰一人としてウクライナで起こっていることを正当化できる人はいません。そしてそこに芽生える怒り、憎しみは計り知れないものがあります。もちろん推測に過ぎませんが、第109編はウクライナにおいては福音としてではなく、やはり呪いの言葉として読まれているかもしれません。大切な家族を奪われた悲しみや怒りが、このような呪いの言葉を口にさせるのはそんなに難しいことではありません。そしてそれはわたしたちにも同じように言えるのではないかと。もし自分が同じ立場であったならば、わたしたちもこれを呪いの言葉として用いると思います。

詩編の講解を始めた時に、カルヴァンの言葉を引用したことを思い出します。「わたしはこの書物を魂の解剖図と呼ぶのを常として来た。なぜならば、あたかも鏡に写すように、その中に描写されていない人間の情念は一つも存在しないからである。そこにおいて聖霊はあらゆる苦悩、悲哀、恐れ、疑い、望み、慰め、惑い、そればかりか人間の魂を常に揺り動かす気持ちの乱れを生々と描き出している」詩編にはわたしたち人間のあらゆる感情が表現されています。ですからこの呪いの言葉と詩人を分ける必要はないと思います。むしろ人間の内面を深く描き出し

ている。憎しみの果てに呪いの言葉を口にする。それはまぎれもないわたしたちの姿なのです。聖書はそこを決して美化していません。聖書は検閲によって削除されることはないのです。ブルグマンというアメリカの神学者は「詩編は見せかけの優しさを突き破る自己発見の行為である」と述べています。見せかけの優しさ、内心は憎しみで満ちていても、表面は穏やかであるような、そういう見せかけを打ち破る。それが神の言葉です。

その信仰に立つ時に、21節以下の部分がより福音としての響きを持つのです。この激しい呪いの言葉を口にしたあと、21節以下では、一転して神さまに救いを求める内容になります。

「わたしは人間の恥。彼らはわたしを見て頭を振ります。わたしの神、主よ、わたしを助けてください。慈しみによってお救いください」（25～26節）この詩人は呪いの言葉を口にした後にふと我に返っているかのようです。正気を取り戻し、自己嫌悪に陥っているようです。このような呪いの言葉を口にしたことを恥じ、己れの貧しさを告白します。それは神さまの御前にその弱さ、貧しさを認め、告白するということです。先ほどのブルグマンは、「詩人の激しい怒りと敵意の全ては、神の知恵と神の配慮に明け渡された」と言います。まずは自分の中にある怒りと敵意が表現され、自らの貧しさを承認する。そしてそのすべてを神さまに明け渡すことで、詩人はこの怒りから解放されていくというのです。

最後の部分「わたしはこの口をもって、主に尽きぬ感謝をささげ、多くの人の中で主を賛美します。主は乏しい人の右に立ち、死に定める裁きから救ってくださいます」（30～31節）ここに詩人の決定的な変化が見られます。さっきまで呪いの言葉を口にしてきた者が、神さまへの感謝、賛美を歌う者とされる。呪いから祝福へ、呪いから賛美へ。一人の人間がそこまで変わることができる。詩編第109編が伝えようとしている福音はここにあります。そしてこの飛躍こそ、十字架で死んで、三日目によみがえられたキリストの救いをそこに指し示すものではないでしょうか。31節「主は乏しい人の右に立ち、死に定める裁きから救ってくださいます」乏しい人であるわたしの右に立たれたのはあの十字架でもっとも乏しい者となられたイエス・キリストに他なりません。憎しみに燃え、呪いの言葉を口にするわたしの傍にキリストは来てくださった。そのわたしの罪を担い十字架におかかりになられ、死に定める裁きをご自身が引き受けてくださった。このことによって、すべての罪の明け渡しは完了したのです。だからこそキリストは言われます。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」（マタイ11：28）と。

もしわたしたちが憎しみや怒りから解放されるとすれば、このキリストの救いによる以外に道はありません。そしてキリストによって憎しみから解放された者は、もはや見せかけではなく、心から祝福を祈る者へと変えられていくのです。「悪をもって悪に、侮辱をもって侮辱に報いてはなりません。かえって祝福を祈りなさい。祝福を受け継ぐためにあなたがたは召されたのです」（Iペトロ3：9）呪いではなく、祝福を祈るためにわたしたちは召されている。この確信を今日また新たにいたしましょう。